

# 「学び・考え・行動する」人創りの「場」としての「大学」

ながれ

宇郷 良介 (うごう りょうすけ/湘南工科大学 人間環境学科 教授)

## 1. 「大学」のいま

私が大学に入学した1975年から45年を経て、今の大学は同じ高等教育機関でも当時とは中身が全く別物との感がある。

高等教育を通して独自性や自立性を高めるという点では同じなのかもしれないが、目指す方向が全く異なっている。私たちの当時は、どのような「人間」になるかが問われていたように思う。それに対して、今の大学ではどのような「社会人」になるかが問われている。

現在、大学では社会人になるための基礎力として「意思疎通力」、「発表・説明力」、「情報収集・調査力」の習得が強化されている。一人前の「社会人」であることが重要な側面なのは間違いないが、やはり全人格の一面でしかない。

大学は、高等専門教育を施し、研究機能によって社会に貢献する機関である(文科省が定義する「今」の大学機能とは異なるかもしれないが…)。専門教育や研究を通してこれらの社会人基礎力を自ら鍛え、社会で活躍できる全人格的な人材が育つ場の提供こそが、大学本来の重要な社会的役割だと思う。

## 2. 当世大学生気質：「大学生」の今昔

私自身、企業の研究職から大学教員に転じていつの間にか10年近くになるうとしている。そんな経験を通じて、大学生世代の今昔にも大きな格差を感じる。昔からの迷言「今どきの若い者は…？」に習って、この格差について感じるままに戯れ言を少し並べたい。

文部科学統計要覧等によると、大学進学率は45年前の1975年度は全体で27.2% (男：

41.0%、女：12.7%) だった。高校生平均4人に1人の進学で、男子は5人に2人、女子で8人に1人しか進学しなかった。対して2017年度、全体で52.6% (男：55.9%、女：49.1) となり、男女ともほぼ2人に1人が進学している。

以前は大学数が少なく進学率も低い分、進学者にはある程度の基礎学力や意識・意欲の高さが必然的に備わっていた。それが、良くも悪くも受験勉強や一発入試という形で、ある一定レベル以上の篩にかけられてきた。

近年、大学数が増え(1975年：420校→2017年：780校)、入試方法もAO入試(人物、あるいは特定能力評価)や指定校推薦入試制度などにより、進学率が45年間で約2倍に上昇した。進学率の上昇は大学生人口を増加させるが、一方で基礎学力や意識・意欲面での幅が大きく広がることも意味する。

大学の雰囲気も当然大きく変わる。私の大学時代、文系・理系に関係なく、キャンパスには、よく言えば熱情があって活気に溢れ、悪くいえば荒々しく尖っていて男臭いコミュニティだったように覚えている(ジェンダーを無視しているわけではなく、当時への個人的郷愁とご理解いただきたい)。それに対して、今は、よく言えば全体的に平和的で落ち着いているが、穿って観ると沈滞した活性度の低い雰囲気だとも言える。全く無関心というわけでもない。しかし、全般的に学生の物事への関心や意欲は低く、良い意味での拘りや執着心が少ない。特に、学修面で「適当に」、「ある程度」といった彼らの言葉に表れているように、その傾向を強く感じる。

### 3. 「考え・学び・行動する」基礎を

#### 身に付ける大切な大学時代

大学時代は、人間の成長段階で心身共に最も活性度が高くなる時期だと思う。門外漢ながら、人間が持っている三大欲求「食欲・性欲・睡眠欲」に加えて、おそらく「知識欲」も最も強くなる時期ではないだろうか。その影響は、専門の修得だけでなく、あらゆる活動面に顕れてもおかしくない。そして、その結果の経験、特に「失敗」を通して学ぶことは多いし、その後の自分の貴重な財産になる。

そんな経験を通して、「考え・学び・行動する」基本的な方法論を実践的に身に付けることができる。これが大学時代の重要な意義だと思う。何よりも「大きな失敗（犯罪などは除いて）をしても、十分やり直しが効く」というのが、この時期の大きな特権である。

### 4. 「考え・学び・行動する」の阻害要因

#### 候補～「豊かさ・便利さ」の功罪～

今どきの学生は、大学時代のこの恩恵を十分享受し活かしているようにみえない。むしろ折角の機会を自ら放棄している感さえある。学修意欲の低い学生は「わからないから勉強しない」とよく言う。教員でなくとも、普通は「わからないから勉強する」だと思う。

あらゆる物事に対して「わからないから、やらない」という考え方は、多くの学生になぜか共通するようで、「考える・学ぶ・行動する」ための起動力を阻害しているようにみえる。その根本的要因はたくさんありそうだが、敢えて独断と偏見で挙げれば、現大学生世代が生まれながらに恩恵を受けている「豊かさ、便利さ」の影響が大きいと考えている。

わからないことがあれば、すぐにインターネットから必要な情報が引き出せる。知らない言葉や英単語は辞書の代わりにウィキペディアで調べられるし、計算は電卓かパソコンがやってくれる。「マンガで学ぶ…」、「絵でわかる…」といった教科書や参考書が出版さ

れ、web上でのeラーニングで「気楽」に学習できるようになった。あらゆる面で「据え膳・上げ膳」化しており、地道で継続的な努力無しに何かを安易（気楽）に得ようとする社会的傾向が加速している気がする。バランスのとれた日々の食事を自分で消化・吸収する代わりに、咀嚼したり消化しなくても、速効吸収できる流動食や栄養補強食品だけで効率良く栄養を摂るようなものである。誠に「豊か」で「便利」な「気楽」に生活できる社会になった。

しかし、学生達の学修状況の実態はどうか？便利なものを使えばわかった、できたと思誤解した状態で終わってしまっている。さらに悪いことに、自分たちが理解していないことに気づく感性さえ乏しくなっている。

筋肉や消化器官を使わなければ機能が衰えるように、自分の頭を積極的に使わないから「考える力」が弱まり、集中力や持続力も弱くなっているように感じる。結果として、大学で身に付けるべき「学び方」自体を学ぶことができず、「やらない⇔わからない」の悪循環に陥っている。

豊かで便利な社会の実現が、皮肉にも「(気)楽さ」、「怠惰」への欲求を、特に多くの若者世代の中で増殖させていることは否めない。

### 5. 大学教育の原点回帰へ

温暖化など既知の地球環境問題に加えたコロナ禍で未来がさらに混沌とする中、自主的に課題発見でき、解決策を創り出せる人材(財)がますます不可欠である。大学時代はあらゆる欲求に対して渴望し、それが物事への関心を高め、「失敗」を恐れず、未知のモノへ挑戦するエネルギーになる。

そんな活性化した自律心ある「人財」を育成するのが大学の使命だろう。大学教育本来の原点は、その使命を果たす処にある。「社会人基礎力」の教育が社会ニーズへの対応であれば、むしろ、今こそ大学教育の原点に戻る改革を実行する時期である。